

うるわし通信

LET'S

一般社団法人
うるわしの桜井をつくる会
〒633-0091 奈良県桜井市
桜井1259エルトさくら内
TEL&FAX:0744-43-7773
URL: <http://lets.some.jp>
E-mail: lets@some.jp

令和元年11月

反骨の考古学者 森本六爾をめぐる人々

NHK Eテレで「反骨の考古学者ROKUJI」が放映された。弥生研究に生涯をかけた、伝説の考古学者の物語である。86年前に稲作文化を提唱した先駆者で考古学と討ち死にしたといわれる男の名は森本六爾（もりもと ろくじ 明治36年—昭和11年）。出生は桜井市大泉。アカデミズムに反抗する強烈な人格。真実を求めるせいぜいな執念。埋もれていた橿原考古学研究所付属博物館にある森本の野帳ノートが調査され、新事実が続々と浮かび上がっている。大胆で創造的な弥生研究を成し遂げた原動力とは何だったのか、共に闘ったお茶水女高師卒業の秀才女流考古学者、妻・ミツギの存在にも注目。32歳で亡くなった波乱の生涯にドキュメンタリーとドラマで迫っている。

再現ドラマでは、森本六爾をハライチ岩井勇氣、妻を伊藤沙莉が演じ、岩井勇氣は雰囲気と顔立ちと体格が似ており、今まで弟子のアニメ「となりのトトロ」のお父さんのモデルふじもり えいじとされている藤森栄二による評伝や松本清張の短編小説『断碑』の内容より具体的な表現で、初めての方にも森本のすべてがわかりやすく表現されていた。今年亡くなった橿研の菅谷文則所長が見たら感動されたであろう。詳細は番組を見ていただくこととして、本稿では森本のパリ留学について述べてみたい。

・パリでの森本の交友

当時の学会の風潮に絶望して箔をつけるために渡欧したという説もあるが、妻ミツギの師匠でもある白鳥庫吉博士の2人の子息はすでにパリに留学しており、当時の考古学会を主おおやま いわお導していた日露戦争の英雄、大山巖大将の子息である

おおやま かしわ大山 柏公爵は『史前学雑誌』でドイツやフランス考古学を

なかや じうじろう特集しており、親友の中谷治宇二郎もパリにいたので留学するのはごく自然な流れであった。当時の渡欧は官費が富裕層しか行けない時代であったのに、夢を実現するため妻のミツギが費用を工面したところは夫婦愛の素晴らしいところである。

昭和6年4月、満州事変直前のきな臭い風潮の中、下関から釜山にわたり、朝鮮半島、中国大陸、シベリア鉄道を経由してモスクワ・ワルシャワを通過し20日間かけてパリに到着する。



森本六爾と妻ミツギ

現在も使われているパリ国際大学都市日本館に居を構えた森本は精力的に研究を開始するが、当時のフランス考古学は旧石器時代を専門に研究しておりあまり成果がなかったようである。森本は妻ミツギにそのことをぼやいているが、逆にミツギはせめてフランス語でもものにして来いと叱咤激励している。

国際的数学者 おか きよし 岡 潔 や考古学者中谷治宇二郎らの交流のなか人脈を広げた森本は、4ヶ月後にパリに来た『女の一生』で一流作家の仲間入りした はやし ふみこ 林芙美子に多くの友達を紹介し、それは林の『巴里日記』に描写されている。

その中に日本館の館長でもあり日本文学研究者セルゲイ・エリセーエフに何度も会っている。彼はロシア系ユダヤ人で、夏目漱石を師と仰ぐ東京帝国大学文学部の卒業生。大正10年にパリに移住し、当地で志賀直哉や谷崎潤一郎たちの翻訳を出版していた。その後アメリカのハーバード大学日本語学科に転じ、元駐日大使エドウィン・ライシャワーや去年亡くなった日本文学者のドンナルド・キーンらを育てた。

・惜しまれる六爾の早世

森本は結核が進行して予定より早く日本郵船靖国丸で40日かけて帰国する。帰国後留学の研究成果を踏まえて、論文『日本に於ける農業起源』を発表、そこで弥生時代すでに農業が行われていたことを主張して一躍、新進気鋭の考古学者として脚光を浴びる。森本六爾は生涯で著書14冊、論文200編近くを残したが、それを支えたミツギ夫人は昭和10年逝去し、本人も後を追うように昭和11年に32歳の若さで亡くなってしまう。墓は二人仲良く並んで桜井市粟殿の極楽寺にある。 (船谷 晴夫)

さくらい菜の花プロジェクト10周年祭

10月19日（土）桜井市木材振興センター「あるぼーる」にて、奈良県環境県民フォーラム自然環境セミナー「さくらい菜の花プロジェクト10周年祭」が開催され、参加者110名と大盛況でした。

まずはナルクオカリナクラブによる演奏でオープニングが飾られ、フォーラム代表の大石正氏による開会宣言があり、来賓として、松井正剛桜井市長、奈良県環境政策課西井保喜課長、大和信用金庫森川善隆理事長のご挨拶がありました。

引き続き、やまと薬膳のオオニシ恭子氏による記念講演では「食は生き方」と題して、欧州での薬膳料理体験や私たちが抱えている食の問題についての講演で、参加者全員が興味深く聴き入っていました。懇親会では、ナタネ油の天ぷらとレモンガラス茶を頂きながら、作業の苦労や収穫の楽しみ話に花が咲き、大賑わいの後に閉会となりました。 (東 俊克)



オオニシ恭子講師

私の歴史感覚

私は北九州に生まれ育ったので、大和の歴史はわからない。古事記・日本書紀はいくら読んでも抽象的・観念的なものだ。天皇を埋葬した陵墓があちこちにあって、それを無暗に有難がる人もいるが、私にはそれもない。

抽象的・観念的な歴史観が身近に感じられるのは、それが語られるときである。歴史の深奥を把握しようと柳田國男が、折口信夫が、各地を探訪したのも、古老の歴史語りを聞いたかかったからに違いない。

いまや古老に近くなった私。郷里の歴史として毎日、いやでも眼に入った関門海峡と、それに沈んだ平家一門の歴史は、近年とくに薩摩琵琶が「元暦二年三月二十四日の卯の刻に」と謡われる時に、俄かに歴史が身体を渡って行く。いつも見ていた波に洗われる黒い巖が脳裏に現れ、逃げ損なって巖に砕けた平家の舟を思う。もちろん、幻想と呼ばれるべき事なのだが、身体を通過するのは平家滅亡の歴史感覚である。

私は実は、近代史を身近なものとして愛惜するものでもあり、平家滅亡と同じくらいに、同郷のアナキスト中浜哲にも心が躍るのである。中浜哲の実家は私の育った地域に近く、その頃、裏門司といわれた企救半島東岸。

僚友大杉栄が、関東大震災の混乱の際に、憲兵隊に虐殺されたことに復讐を企て、死刑となって若い生命を絶たれるのだが、これが妙に八〇〇年の歳月を超え、一本の具体的な歴史にまとまるのだ。それからまた逆走して、平家一門の悪七兵衛景清に思いは走る。彼が自ら両眼を抉り、盲者となって源頼朝を暗殺しようとする話は、遠く古代中国の秦の始皇帝への刺客と結びつく。大陸は門司・下関には身近な存在で、一人の統率者に従う脱力感のある朝鮮人の一群をしょっちゅう見ていたが、あれが徴用工といわれた人たちだったと思う。

私の歴史話は他愛のないものだが「うるわしの桜井をつくる会」の歴史譚は、その点、実に地についたもので、米田昌徳さんは「青木廃寺」を自らの土地の話として語る。この人の話は、柳田・折口両碩学が求めた古老の話だ。彼はまた、安倍の小字について語る。こうした伝承を語ることが歴史であると、つくづく思う。

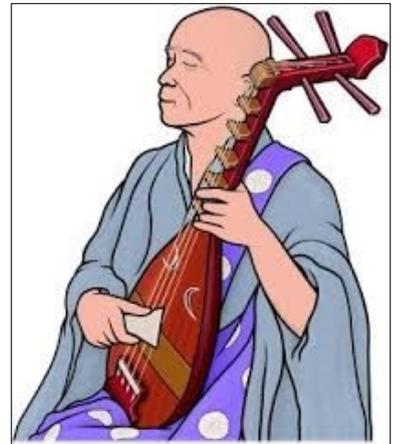
米田さんは約一五〇年前、あの廃仏毀釈の嵐の中で、粉碎される運命にあった十一面観音像を、自宅に匿まった家の裔であるから、まさしくこの人は近代史中の人でもある。ご承知のように十一面観音像はやがて世に出て、日本最初の国宝となった。

近代史と言え、その入り口あたり、芝村騒動という現代でいえば住民訴訟のようなことがあり、直訴したのはみな、村の名門・名家だったと聞かすが、半ば予想されたように断罪され、家門は滅びた。しかし、会員石井一好さんの調査では、村人はこれを奇篤として、いまま近在各所で哀悼され祭祀されているという。しかも、権力を怖れるままに、かなり私的な法要として寺々に残っているという事実を聞いた時に、私の大和への歴史感覚は動悸を打った。

楠木克弘さんは大福の古代遺跡を語った。語りによって歴史はよみがえり、血が走り、肉が生じる。この地から常に見える二上山に眠る大津皇子の悲史にも、ようやく接近する思いがあるが、箸墓古墳になると、私は正直、未だなじめない。邪馬台国を大和とするのは鼻眞のひき倒しかも知れない。いつの世にも狭隘な国家主義があり、学問をも襲う。汚染されるのは常識世界も免れ得ないものである。

また、近代史に戻るが、桜井といわず、奈良県の近代史は、水平社運動に始まるといっても過言ではないと思う。この面の歴史譚をさらに期待したい。

(浅川 肇)



薩摩琵琶

文化財(歴史のある建物)を保存継承するために

桜井市内には指定されていない歴史のある建物(以下文化財とする)が数多く残っています。しかし、住宅として使われているところが多く、現在お住まいの方々が住まわれなくなると空き家になり、少しずつ潰されている現状です。今歯止めをかける対策を講じなければ、都会に行ってしまった若い世代は文化財に住まず、潰して売られますので、ますます減っていくことが予想されます。

桜井は美しい山並みと田園、古い街並みが作る景観がすばらしいところです。その古い街並みが無くなってしまうと魅力が半減し、観光人口も減るだろうと考えられます。市内の文化財を守り継承していくための法律を整備するにはどうすればよいかを、文化財保護法改正に携わられた村上先生にご講演していただきます。



村上裕道 講師

日 時：12月14日(土) 14時30分～16時30分 参加無料

場 所：桜井市まほろばセンター交流室3

講 師：村上裕道さん(京都橘大学文学部歴史遺産学科教授)

問合せ：090-3652-8104(ひがし)

お知らせ

●図書館友の会

11月の読書会は、G. ガルシア＝マルケス『予告された殺人の記録』です。町をあげての婚礼騒ぎの翌朝、充分すぎる犯行予告にもかかわらず、なぜ彼は滅多切りにされねばならなかったのか? 閉鎖的な田舎町でほぼ30年前に起きた、幻想とも見紛う殺人事件。

日 時 11月26日(火)13:30から

場 所 桜井市市民活動交流拠点会議室(エルト桜井2階内)

問い合わせ先 浅川 肇 TEL:090-1961-6345

友の会会員以外の参加も歓迎します。



●歴史学習会の開催

「神様へのお供えについて」 講師 浅川 肇

日 時 11月22日(金) 14:00～16:00

場 所 桜井市市民活動交流拠点会議室(エルト桜井2階内)

問い合わせ先 浅川 肇 TEL:090-1961-6345



お供え物

【編集後記】連続的に台風が襲来し、19号では大きな風水害被害が東日本を中心に広域に発生した。多くの方が避難所での不自由な生活を送られていることから、早期の復旧・復興が望まれる一方、今後も大規模な台風襲来が予想されることから、地元での避難勧告・指示や避難所の在り方についても、日頃からの検討準備が必要とされる。避難勧告が解除されると、「夜中でも避難所から出て帰宅しなければならない状況があり、高齢者にとってはつらい」と改善を求める声を伺った。さて、今回は二人の方から投稿を頂き、通信に掲載させて頂いた。会員・会員外からの投稿を引き続きお願いしたい。(編集子 楠木)

うるわし通信発行人
高瀬 安男
TEL:090-1678-9157